

2023 年 6 月 25 日(日)

2023 年度も激動の予感

群馬大学 名誉教授 小林春夫

数年前から十数年前の社会経済、科学技術、研究教育を論じた本を読み返すことがある。これらの本は出版されたときに関心が高い話題を扱った「生もの」であるが、それから時間が経った現在、これらの論は正鵠を射ていたかがわかる。必ずしも当たっていない場合はどのような予想できなかった要素が入ったのかを考察する。

2023 年度に入り次のことに気が付く。

- (1) 対面の行事が増える
対面の良さとオンラインの便利さの両方を認識できる。
- (2) 日本の世界での立ち位置が大きく変わっている
海外出張・国際会議出席をすると実感できる。
- (3) デジタル化により社会がどんどん変わっている。
デジタル化により仕事の生産性が格段に上がっている。
例えば、6 月 23 日(金) SDRJ シンポジウムの下記の招待講演をオンラインで聴けた。
「産総研の次世代コンピューティング基盤戦略と半導体・量子技術開発の拠点としての取り組み」

AI 技術の具体的な有効性については それを活用しているプロ将棋棋士の言っていることが参考になる。

社会・技術の変化に皆どうしたらよいのか、必死に情報を集め考えている。
現在の動きを基にしたその延長線上を考える「線形予測：だけでは足りないと感じている。
予想が難しい新たな要素により 非線形、不連続(ジャンプ)があるのではないかと思う。
それを考えるのには「歴史に学ぶ」ということに加えて、日々「勝負の世界」に生きてきた人の言葉は参考になる。例えば、ときどきプロ野球の野村克也氏の本を読んでいるがヒントになることが多々ある。

識者は 3 つの視点(trilateralism)からおよび時間ダイナミクスを考えよと説く。

いずれにせよ、現在 急速に大きく社会・技術が変化していると感じている。